吉備国際大学研究紀要（保健科学部）第21号，19～26，2011

理論的研究の方法論としての構造構成的本質観取

京極　真

Structure-construction based essential intuition as methodology of theoretical study

Makoto KYOUGOKU

要　　旨

本論では、作業療法研究における理論的研究の方法論として、構造構成的本質観取の意味と可能性を検討した。構造構成的本質観取は作業療法原理の研究開発に役立つ可能性がある。我が国の作業療法研究で理論的研究が活性化することが期待される。

キーワード：構造構成主義、理論的研究、構造構成的本質観取
Key words：structural constructivism，theoretical research，structure-construction based essential intuition

1．はじめに

作業療法研究の方法論には、量的研究と質的研究の他に、理論的研究がある[1)]。ここでいう理論的研究とは、理を対象にした内省や洞察を行い新しい知見を生みだすことである。しかし、須川ら[2)]が指摘したように、我が国においては海外で開発された理論がそのまま援用されているのが実情であり、日本発の作業療法理論を開発する理論的研究はほとんど進んでいない[3)]。こうした傾向は、約17年前に鎌倉[4)]が我が国の作業療法研究には理論的研究が欠如していると指摘したことからもわかるように、決して今にはじまった問題ではない。我が国の作業療法士の自律性と独自性を高め、国民のニーズに応じた作業療法を展開していくためには、我が国の作業療法の実情を捉えた理論的研究の充実が求められる。

ではなぜ、現在に至るまで、我が国の作業療法では理論的研究が豊穣してこなかったのだろうか？

その理由のひとつとして、理論的研究の「方法論」について検討が行われてこなかったことが挙げられる。本論でいう方法論とは、方法を対象にした理論を意味する。つまり、理論的研究の方法について手続きの明示化が試みられたり、議論が展開してこなかったことが、我が国の作業療法における理論的研究を立ち遅れさせたのではないか、と考えられるのである。方法論の検討は、研究手続きの具体化、明示化につながる。我が国の作業療法研究にそれが欠けるということは、理論的研究の方法が非明示的だったことを示し、理論的研究が豊穣しなかったのはある意味で必然だったと言える。

理論的研究のこうした現状は、量的研究と質的研究に対比させるとより一層はっきりする。以前から我が国の作業療法では、量的研究や質的研究の方法論を紹介した論文[5)～10)]や書籍[11)～13)]は以前から数多く発表されてきた。つまり、量的研究と質的研究は、その方法論の検討が広く行われてきたことによって、それら研究の方法が作業療法士に具体的に伝わり、取りくみやすくなっていると言える。そのため、我が国の作業療法では、量的研究と質的研究を活用した論文が理論的研究とは比べものにならないほど数多く発表されていると考えられる。

なお、海外の作業療法研究に関連する書籍[14)～17)]においても同一の傾向が認められる。しかし、海外の作業療法研究は理論的研究の方法が非明示的であるにもかかわらず、人間作業モデル[18)]、作業の可

吉備国際大学保健科学部作業療法学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町８
Department of Occupational Therapy, School of Health Science, KIBI International University, 8 Iga-machi Takahashi-City, Okayama 716-8508, Japan

能化モデル[19]、作業適応[20]等の独創のある作業療法理論が発表されている。そうした違いは、海外の作業療法士たちが作業療法理論を輸入に頼ることができず、自分たちで身の上を説明せざるを得なかったという事情が関わっているのではなかろうか。その意味において、海外の作業療法士は理論的研究の方法が非明示的でも、なかば伝統として作業療法理論を示す営みが根づいている可能性がある。

したがって本論では、作業療法理論の開発という伝統と方法論を持たない我が国において、今後の理論的研究を活性化させるため、筆者[21]が考案し、西條[22]がバージョンアップさせた構造構成的本質観取（structure-construction based essential intuition essential intuition）という理論的研究の方法論を概説し、作業療法研究における理論的研究で適応できる研究テーマの範囲を明らかにする。そして、作業療法研究における構造構成的本質観取の意義と可能性を論じる。それにより、我が国の作業療法研究で理論的研究が豊穣しない理由のひとつと考えられる、方法論の未検討という問題が一歩前進すると期待できる。

２．構造構成的本質観取の概要

構造構成的本質観取は、筆者がフッサール[23)、24]、竹田[25)、26]、西[27]の現象学的本質観取、西條の構造構成主義[28]の議論を経由して開発した関心相関的本質観取（interest-correlativity based essential intuition）に、哲学的構造構成から存在－言語－構造論的還元[29]と契機相関性[30]、および科学的構造構成から構造化に至る過程の開示[31]を援用して組みこみ再定式化したものである。

なお、概要を進める前に構造構成的本質観取に内在する理路の定義を確認しておく（紙面の関係上、詳細な議論は省く）。構造構成的本質観取は現象から本質と原理を抽出するが、ここでいう現象とはすべての立ち現れである。すなわち、現象には客観的事実だけでなく、幻覚や妄想、錯覚等のあらゆる経験が含まれる。関心相関性とは志向相関性のバリエーションであり、意味・価値・存在は身体・欲望・関心・目的に相関的に規定されるという原理である。構成される構造は、現象の志向相関的な分節によるものになる。哲学的構造構成とは構造の成立条件を内省する思考法であり、存在－言語－構造論的還元とは関心相関的存在論－言語論－構造論を方法視点として哲学的構造構成を遂行することである。関心相関的存在論－言語論－構造論とは、構造の共通了解可能性を基礎づけた理路である。契機相関性とは、構造や志向性は諸要因に相関して規定されるという原理である。科学的構造構成は量的研究と質的研究の科学性を原則等価に基礎づける理路であり、構造化に至る過程の開示は研究結果等の人為的な構築物にたどりつくまでのプロセスを他者に提示することである。

さて、これらの理路を備えた方法論である構造構成的本質観取は、遂行者がどのような契機に遭遇し、どういった関心を持つようになり、何らかの事柄の一番大切なポイントをどのように構造化したのかを開示し、異なる立場の人でも理路を共通了解できるよう論理を展開する方法である。また、構造構成的本質観取（正確にはバージョンアップ前の関心相関的本質観取）は、西條の構造構成的研究法[32]の「原理抽出の原理」に位置づけられていることからもわかるように、何らかの事柄（経験や理論など）の「本質」を言いあて、それを「原理」にまで鍛えていく方法である。それによって、構造構成的本質観取は矛盾対立する事柄に共通する理論的基盤を作り出すことを目指す。

なお、ここでいう本質とは、何らかの構造の成立条件の中心であり、それを立場の違いを越えて納得に至れるよう言葉で概念化したものである。つまり、本質とは、ある事柄をその事柄にたらしめているような根源的な構造であると言える。他方、原理とは、特定の関心のもとで論理的に考えていけば、何らかの事柄の本質について共通の了解が得られる可能性を担保した理路のことである[33]。言い換えれば、原理とは構造構成的本質観取の遂行者が抽出した本質に、他者も到達できるよう注意深く論証を積み重ねて提示したものであると言える。

またこの方法論は、原理の妥当性を判断する方法

でもある。もう少し言えば、構造構成的本質観取において原理は、特定の関心のもとで共通の了解を作りだせる論証を備えているかどうかを検討することによって、その妥当性が判断することができるのだ。構造構成的本質観取（関心相関的本質観取）が備える「原理の関心相関的評価」という機能は、これの原型である現象学的本質観取にはないため、この方法論の独創がとりわけ際立つ点だと言える。

３．理論的研究の方法論としての構造構成的本質観取

では、構造構成的本質観取は理論的研究の方法論として、どのような手続きで用いることができるのだろうか？その具体的手順は次のように整理できる。

（1）関心を定める

この方法論ではまず、特定の関心の設定、つまり本質を取り出したいテーマを明示的に定めることからはじめる。導入として、特定の関心は「○○とは何か」の○○の中に何らかの概念を代入することによって設定できる。たとえば「作業療法とは何か」というようにである。

このときあわせて、特定の関心に至った理由（契機）についても開示していく。上記の例で言えば、「作業療法とは何か」という関心を持つ契機を他者に開示するのである。それによって、他者は設定された関心の価値や意味を理解することができる。また、関心に至った諸契機の開示は、関心それ自体の妥当性を検討できる機会を提示することができ、より洗練された問題設定にめがける可能性も提供できる。

しかし、これだけでは○○の輪郭を捉えることができず、洞察によって○○という構造の成立条件の芯に迫れない。そのため、設定した関心に図と地の分化とでも言うべき操作を加えることになる。たとえば「作業療法とは何か」であれば「作業療法と言える実践と、作業療法とは言えない実践はどう違うのか」「いかなる条件であれば作業療法と言えるのか」というように関心を操作して定めなおすのである。この手続きにより、○○の輪郭を捉えやすくなる。

なお、関心を定めるにあたっては、あらかじめ関心に該当する領域の先行研究を検討しておく必要がある。研究状況を理解しておかなければ、構造構成的本質観取によって定めた関心が妥当かどうかを、研究者自身が判断できないためだ。

（2）哲学的構造構成を遂行する

関心が定まれば、○○という構造の成立条件を検討していく[34]。つまり、一般に流通する○○の辞書的な意味は一旦脇におき、○○という構築物が構成された要件を内省によって明らかにしていくのだ。

たとえば、「作業療法と言える実践と、作業療法とは言えない実践はどう違うのか」という関心を定めたならば、作業療法という構造が成立するときとそうでないときの理由を検討するのである。すると「作業療法」という構造が成立する前提には、たとえば「クライエントは作業機能障害の改善に取りくんでいる」「作業療法士はクライエントの生活習慣の改善に介入している」などの諸条件が浮かびあがってくるはずだ。他方、そうでない場合では、「心身機能障害にのみ介入している」などの諸条件が取りだせるかもしれない。

（3）関心相関的想像変容を遂行する

哲学的構造構成によって○○という構造が成立する諸条件を取りだせたら、そうした諸条件が様々な○○にも妥当するかどうかを内省し、できるだけ多くの人にとって妥当するような言葉を用いて表現していく[35]。つまり、哲学的構造構成によって取り出された○○の諸条件を、「あらゆる○○に妥当するかどうか」という観点からふるいにかけて、立場の違いを越えて納得できるであろう条件のみになるよう精査していくのである。

上記の例で言えば、医学モデルに準拠する作業療法士、作業モデルに準拠する作業療法士、特定のモデルに準拠しない作業療法士などの違いを越えて、作業療法士であれば納得に至れるような「作業療法」という構造の成立を支える諸条件を取り出そうとするのである。

たとえば、筆者の場合であれば、（2）で述べた諸条件を練り直していけば、そこに共通する条件として「方法」というキーワードが浮かんでくる。なぜなら、特定のクライエントに作業療法を実施する場合、例外なく何らかの問題を解決するための手段として、作業療法が用いられていると考えられるためだ。しかしこれだけでは、あらゆる問題解決の手段に対して妥当する条件になりうると考えられる。そのため、ある「方法」が作業療法として規定されうる諸条件を考える必要が生じる。そこで、（2）で取り出した諸条件の内省を今一度行い、「作業における問題」という条件が共通するものとして浮かんでくると考えた。

本論の目的は「作業療法」を構造構成的本質観取することではなく、作業療法研究における理論的研究の方法論としてこの方法の意義と可能性を検討することであるため、これ以上の詳細な議論は別の論文にゆずるが、おそらく作業療法士の立場を超えて「『作業における問題』を解決するための『方法』のことを『作業療法』と呼ぶのだ」という言い方は、実感としての納得が得られやすいのではないか（と筆者はさしあたり考えた）。

ここで重要なポイントは、この条件の取りだしには構造構成的本質観取の遂行者の洞察と知識に基づいた「発想」が要請されるという点である[36]。なぜなら、哲学的構造構成によって○○という構造が成立する諸条件を取り出し、そこからあらゆる○○に妥当しうるであろう条件（本質）を絞り込んでいったとしても、それは内省できる範囲でのみ妥当しうる条件でしかなく、あらゆる○○に共通する条件かどうかはあくまでも蓋然的なものでしかないためだ。その意味において、構造構成的本質観取は構造の成立を支える諸条件の中心に向かって飛躍する思考法であると言える。

（4）本質の原理化を試みる

しかし、この飛躍は構造構成的本質観取の遂行者にとっては納得できるものであっても、他者からすればなぜそのような飛躍が妥当と言えるのか、を理解できない可能性を生みだすものである。哲学的構造構成や関心相関的想像変容は、遂行者が内的に展開する思考法であることから、一般的に非明示的なかたちで展開する。そのため、そうした疑問を持たれやすい宿命を持つと思われる。実際、筆者が（3）でごく簡単に示した「作業療法」の構造構成的本質観取の結論に対して、多くの読者が「本当にそう言えるのだろうか？」と疑問に思ったはずである。

そこで、理論的研究の方法論としての構造構成的本質観取は、（3）によって本質であろうと思われる条件を取りだせたら、次は（1）で定めた関心のもとで論理的に考えていけば誰もが共通の了解に至れるよう、先行研究を踏まえつつ丁寧な論証を積みかさねて開示していくことになる。すなわち、構造構成的本質観取はここに至って一種の発想によってつかみ出した本質を、理論論文を書きあげるという営みを通じて論理的に考えていけば誰もが了解できる可能性を備えた原理として提示していく過程にはいるのだ。

その際、構造構成的本質観取の遂行者は、自身が取り出した本質であろう諸条件の表明のみを行うようであってはならない。なぜなら、「私は××と△△が○○の本質だと考えた」などの意見表明は、なぜそう言えるのかという問いに答えることができず、特定の関心のもとで論理的に考えていけば共通の了解が成立するような原理になりえないためだ。そのため、この方法を活用する理論的研究者は「ある立場には妥当するが、別の立場には当てはまらない」という例外が起こらないような理路を、注意深く慎重に吟味を重ねながら積みあげていくことが求められる。それによって、はじめて構造構成的本質観取によって取り出した本質を、透徹した原理にまで高めることができる。

（5）原理の妥当性を吟味する

さらに厳密に言えば、（4）によって本質の原理化を試みたとしても、それは他者による吟味を経て事後的に了解されるものであり、どんなに慎重に論証を重ねてもそれ自体が本質の原理性を担保するものではない。これは、原理の定義から論理的に導かれたものであり、構造構成的本質観取の「他者によ

る吟味と修正の可能性に開かれた言語ゲーム」という特徴を反映している[37]。

上記でも述べたが、構造構成的本質観取において原理の妥当性は、設定された関心のもとで論理的に考えていけば、誰もが共通の了解を持ちうる理路が積み重ねられているかどうか、という観点から吟味される。それによって、他者が深く了解できたならば、構造構成的本質観取によって取り出された諸条件に原理性が帯びることになる。

一方で、他者がその論証プロセスに論理的な問題を見つけだしたならば、そのことを論証によって明らかにし、修正したり、新たな原理に置きかえたりすることができる。もちろん、これは他者だけでなく、構造構成的本質観取の遂行者自身によっても行われるものである。いずれにしても、構造構成的本質観取によって構築した本質と原理になりうるであろう諸条件は、他者の相互了解によってはじめて本来の本質と原理になりうるものとして提示されることを忘れてはならない。

4．構造構成的本質観取で探求できる作業療法の研究テーマ

以上、理論的研究の方法論として構造構成的本質観取の手順を論じてきたが、この方法によって探求できる作業療法研究のテーマにはどのようなものがあるだろうか？

先に論じたように、構造構成的本質観取はまず「○○とは何か」という関心の設定と地と図の分化という操作からはじまり、経験の内省によってある構造の成立条件の核心を取り出す。そして、それのブラシュアップを試みることによって、自他の間で共通の了解が成立する理路を組み立てていく営みである。したがって、この方法論に適した研究テーマの条件は、理論的研究者が経験できる事柄であり、かつ共通了解が成立していないこと、が挙げられる。経験できない事柄（たとえば宇宙に果てはあるのか、時間のはじまりとは何か等）であれば、構造構成的本質観取を徹底的に展開しても構造の成立条件の中心を取り出すことはできないし、既に共通了解が成立したテーマであればこの方法によって改めて共通了解の成立を試みる必要が乏しくなるためである。

そうした観点から作業療法を振り返ると、以下のような研究テーマを構造構成的本質観取に適したものとして挙げることができると考えられる。

（1）作業療法とは何か
（2）作業とは何か
（3）作業療法で解決すべき問題とは何か
（4）急性期（あるいは回復期、維持期、慢性期など）における作業療法の存在理由とは何か
（5）作業療法の専門性とは何か

もちろん、他に妥当な研究テーマはあるだろうが、考え方の違いを越えて妥当する理路が提示されていないという点において、さしあたり上記のような研究テーマが、構造構成的本質観取の探究に適していると考えられる。これらの研究テーマは作業療法士であれば経験できる事柄であると思われるし、共通の了解になりうる解答も示されていないためだ。

すると、論者によっては、上記で示した研究テーマは構造構成的本質観取でなくとも、質的研究や量的研究によっても探求できるのではないか、という疑問を持つかもしれない。確かにそれはその通りなのだが、質的研究や量的研究は仮説の「実証」という点において効力を発揮するものであり、構造構成的本質観取のように仮説そのものを問い直し、実証以前の領域に立ち返って根本から共通の構造をつかみだす術を持っていない。そのため、質的研究や量的研究によって上記の研究テーマを探求しても、構造構成的本質観取のように考え方の違いを越えて妥当しうる可能性を備えた原理を取り出すことはできない。

もう少し具体的に言うと、たとえば（1）であれば、質的研究によって対象となった作業療法士が考える作業療法観の共通性を取り出すことはできる。しかし、そのようにして得られた作業療法観は、暗黙のうちに内面化された作業療法のパラダイムが前提にされている可能性が高く、異なるパラダイムを越えて妥当する理路をつかみ出すことはできないだろう。また、量的研究は特定の仮説のもとで量的な傾向を明らかにするため、仮説そのものの問い直し

は背理となってしまい、構造構成的本質観取のような営みは原理上不可能である。したがって、上記で示した研究テーマの探求には、構造構成的本質観取を活用した理論的研究の方法論が適していると考えられる。

5．本論の限界

もちろん、理論的研究の方法論は構造構成的本質観取の他にも存在する。本論の目的からして、そのすべてに触れることはできないが、代表的なものを挙げれば、関心相関的メタ理論構成法[38]、理論心理学の方法[39)～41)]、看護学の概念・立言・理論開発法[42]、社会科学の理論構築法[43] などがある。これらの理論的研究の方法論は、質的研究や量的研究では解決できない実証以前の研究テーマの探求に適したものである。今後、これらを作業療法研究の文脈におきなおして、作業療法における適用範囲や具体的な方法論の検討を行う必要がある。そうした研究の積み重ねにより、我が国の作業療法研究においても理論的研究が活性化され、我が国独自の作業療法理論を研究開発していくことが期待できる。

6．まとめ

本論では、我が国の作業療法における理論的研究を活性化するため、その方法論のひとつとして構造構成的本質観取を論じ、意味と可能性を検討した。その結果、構造構成的本質観取は、作業療法における実証以前の研究疑問の解消に役立つこと、また共通の了解が得られていない研究テーマに対して原理性の高い理路を提供できることが論じられた。

今後は、作業療法における理論的研究により適した方法論の検討に加えて、理論的研究の具体的な成果を示していく必要がある。それによって、我が国の作業療法の実情に見合った作業療法理論の開発が進み、クライエントの健康と福祉の向上に作業療法がより一層役立つものになるだろう。

Abstract

The aim of this study was to investigate the methodology of theoretical research in occupational therapy research. Structure-constructive essential intuition as theoretical research was developed, based on structural constructivism. This methodology will be useful as theoretical research in occupational therapy research.

文　献

1）鎌倉矩子，宮前珠子，清水　一：作業療法士のための研究法入門．三輪書店，10-21，1997

2）須川重光，小澤加奈子，久常　良：日本の作業療法における対象者理解の歴史的変遷，脳血管障害の作業療法からみる健康観と主体性．藍野学院紀要21，35-46，2007

3）一時期，川モデルという日本発の作業療法理論が国内外の作業療法学会で発表されたが，これは学会発表にとどまるものであり，その後事例研究が機関誌『作業療法』に掲載されたが，理論的研究による本格的な理論論文としてはいまだ発表されていない．なお，洋書には川モデルの専門書がある．
Iwama M: The Kawa Model, Culturally Relevant Occupational Therapy. Churchill Livingstone, 2006

4）鎌倉矩子：作業療法研究の方向性．作業療法11（2），180-183，1992

5）清水　一：論文 書き方のポイント（2）研究論文の書き方，調査的研究および実験的研究を中心に．作業療法ジャーナル34（9），925-930，2000

6）長谷龍太郎：論文 書き方のポイント（4）質的研究論文の書き方，Pierceの方法論を中心に．作業療法ジャーナル34（11），1089-1096，2000

7）湯浅孝男：論文 書き方のポイント（3）研究論文の書き方，事例研究を中心に．作業療法ジャーナル34（10），1011-1014，2000

8）鎌倉矩子：作業療法研究のもう一つの扉，質的研究．作業療法20（6），525-532，2001

9）種村留美：質的研究の有用性，質的に観察することから学ぶ．作業療法20（6），544-547，

2001
10）宮前珠子，藤原瑞穂：アメリカではどのように質的研究が取り入れられているか?AJOTにおける質的研究の現状．作業療法20（６），533-539，2001
11）鎌倉矩子，宮前珠子，清水　一：作業療法士のための研究法入門．三輪書店，1997
12）山田　孝（編）：作業療法研究法．医学書院，2005
13）文献11は理論的研究に触れている．しかし，その内容は論発展の３段階，理論形成のプロセス，帰納法と演繹法の概略の紹介にとどまっており，理論的研究の具体的な方法論については言及されていない
14）Kielhofner G: Research in Occupational Therapy, Methods of Inquiry for Enhancing Practice. F A Davis Co, 2006
15）Carter R: Rehabilitation Research, Principles and Applications. Saunders, 2010
16）Stein F: Clinical Research in Occupational Therapy. Singular Pub Group, 2000
17）Cook JV: Qualitative Research in Occupational Therapy, Strategies and Experiences. Singular Pub Group, 2001
18）Kielhofner G ed: Model of Human Occupation, Theory and Application. Lippincott Williams & Wilkins, 2007
19）Townsend E, Polatajko H: Enabling Occupation Ⅱ, Advancing an Occupational Therapy Vision for Health, Well-being & Justice through Occupation. Canadian Association of Occupational Therapists, 2007
20）Schkade JK, McClung M: Occupational Adaptation in Practice, Concepts and Cases. Slack, 2001
21）京極　真：「方法」を整備する－「関心相関的本質観取」の定式化．看護学雑誌72（６），530-534，2008
22）西條剛央：「科学的である」とはどういうことなのかといった難問をどのように考えればよいのか？：難問を見極める構造構成主義の10の視点　International nursing review，33（２），27-32，2010
23）Husserl E（渡辺二郎・訳）：イデーンⅠ－１．みすず書房，1979
24）Husserl E（長谷川宏・訳）：経験と判断．河出書房新社，1999
25）竹田青嗣：現象学入門．NHKブックス，1989
26）竹田青嗣：はじめての現象学．海鳥社
27）西　研：哲学的思考，フッサール現象学の核心．筑摩書房，2001
28）西條剛央：構造構成主義とは何か，次世代人間科学の原理．北大路書房，2005
29）山口裕也：自己効力理論をめぐる信念対立の克服，存在－言語－構造的還元の提起を通して．構造構成主義研究４，71-103，2010
30）桐田敬介：契機相関性の定式化へ向けて，構造構成主義におけるその都度性の基礎づけ．構造構成主義研究３，159-182，2009
31）前掲書28の94-97
32）西條剛央：研究以前のモンダイ，看護研究で迷わないための超入門講座（JJNスペシャル）．医学書院，2009
33）京極　真：現代医療の根本問題の終焉に向けて．看護学雑誌73（５），86-91，2009
34）前掲書28で示された哲学的構造構成の遂行を意味する．哲学的構造構成とは，構造の成立条件を解明する思考法である．前掲書23から27で示された現象学的還元が哲学的構造構成の原型である．しかし，哲学的構造構成は，現象学的還元から超越論的主観性や身体の同型性などの根本仮説性の高い概念が抜き取られており，より厳密な方法原理として再構築されている
35）前掲書24でフッサールが詳細に提示した想像変容を，構造構成主義の関心相関的観点から遂行することを意味する．つまり，関心相関的想像変容は，研究者によって定められた関心のもとで，自分の確信を支える個人的な諸条件を思考実験の繰りかえしによって練り直し，できるだけ多くの人が腑に落ちるであろう一般性のある諸

条件へと濃縮させていく思考法であると言える
36）井上恵世留：構造構成主義を学びたいすべての学生へ，自主ゼミを通して考えたこと．西條剛央，京極　真，池田清彦（編）．なぜいま医療でメタ理論なのか，構造構成主義研究３．北大路書房，79-90，2009
37）京極　真：現代医療の根本問題の終焉に向けて．看護学雑誌73（５），86-91，2009
38）西條剛央：メタ理論を継承するとはどういうことか？メタ理論の作り方. 構造構成主義研究１，11-27，2007
39）Kukla A（羽生義正・編訳）：理論心理学の方法，論理・哲学的アプローチ．北大路書房，2005
40）江川玫成：経験科学における研究方略ガイドブック，論理性と創造性のブラッシュアップ．ナカニシヤ出版，2002
41）森正義彦・編：科学としての心理学，理論とは何か？なぜ必要か？どう構築するか？培風館，2004
42）Walker LO，Avant KC（中木高夫，川崎修一・訳）：看護における理論構築の方法．医学書院，2008
43）Hage, J（小松陽一・野中郁次郎・訳）：理論構築の方法．白桃書房，1978